

SPELT

実用英語教育学会

December 2013 Vol.2, No.2

NEWSLETTER

目次

[巻頭言](#)

実用英語教育学会会長 釣晴彦

[第2回研究会について](#)

研究発表

- ◆ [Authentic Material の活用による英語力および思考力・表現力の向上についての実践報告—OECD Better Life Index のデータを用いた Authentic Material 活用の効果について](#)

山崎 秀樹（北海道千歳高等学校 教諭）

- ◆ [小学校新指導要領の外国語活動\(英語活動\)が子どもたちにもたらした変化—3000人の子
どもたちが教えてくれる成果と課題—](#)

久野寛之（札幌大谷大学社会学部地域社会学科 教授）

招待発表

- ◆ [Unexpected Things in Our English Life : Three Great Assets for EFL Learners](#)

佐藤 文子 氏

聴衆参加型特別プログラム

[Toastmasters Club \(Sapporo Pioneers Toastmasters Club\) のデモ例会](#)

シリーズ「[小学校からはじまる実用英語教育](#)」

久野寛之（札幌大谷大学社会学部地域社会学科 教授）

[お知らせ](#)

巻頭言

2011年から全国の小学5、6年で「外国語活動」が必修となり、2012年は中学校、2013年4月からは高等学校で新学習指導要領が施行された。そして、矢継ぎ早に、道徳や総合学習と同様に正式な教科ではない「外国語活動」（週1時間が基本で「音声や基本的な表現に慣れ親しませる」ことが目標とされている。）が3年生に引き下げられ、5年生からは2020年度を目処に正式な教科にする方針が文部科学省より打ち出された。ほとんどの学校ではクラス担任の教師が担当しており、外国人などの外国語指導助手（ALT）を活用している学校も多い。国の特例制度を利用して小4以下で教えているところもある。早い時期から、基礎的な英語力を身に付けさせるのが目的だが、現在進行形である「外国語活動」の検証も終わっていない中で動きである。学校現場は今後相当混迷してくるのが予想される。

第2回実用英語教育学会の研究会は、10月19日（土）に、聴衆参加型特別プログラムもあり、盛況の内に終えることができた。久野寛之先生の「小学校新指導要領の外国語活動（英語活動）が子どもたちにもたらした変化」と題して3000人の子どもたちが教えてくれる成果と課題を報告した内容は、大変な時間をかけてデータ集積と分析を行っている。とても貴重な試みであり、今後の検証が期待できる。もう一人の発表者は、山崎先生である。「Authentic Material の活用による英語力および思考力・表現力の向上についての実践報告」として OECD Better Life Index のデータを用いた Authentic Material 活用の効果について発表された。今や北海道の道立高等学校では英語科の専門学科があるのは2校のみである。そこでの専門科目である「時事英語」を3年間実践してきた報告である。今後の継続と成果が楽しみである。また、招待発表者である佐藤文子氏は、「Unexpected Things in Our English Life: Three Great Assets for EFL」として、ご自分の経験から日本人同士が英語で会話することが英会話能力の習得の上で大変効果的であることを力説されていた。

聴衆参加型特別プログラムとして、Toastmasters Club（Sapporo Pioneers Toastmasters Club）のデモ例会が実演された。例会の一部に本研究会参加者も加わり、貴重な体験をさせてもらった。

今後も様々な人を招待して、実用英語教育はどうあるべきかを考察していきたい。次回は2月に予定されているので、興味のある方は是非参加してください。

実用英語教育学会会長
札幌学院大学
釣 晴彦

第2回研究会について

2013年10月19日(土)札幌大谷大学において、第2回研究会が開催され、高校・大学教員のみならず英語に関わっておられる方々にご参加頂きました。本大会では、2つの研究発表、招待発表、そしてToast Masters (Sapporo Pioneers Toastmasters Club)の方々をお招きして、実用英語教育学会参加者を交えてデモ例会を実施いたしました。

参加者は合計で26名となり、盛会のうちに終了することができました。

研究発表

Authentic Materialの活用による英語力および思考力・表現力の向上についての実践報告—OECD Better Life Indexのデータを用いたAuthentic Material活用の効果について

北海道千歳高等学校 山崎 秀樹

今回の実践研究発表は上記のテーマで、北海道千歳高等学校の国際教養科3年生38名を対象にした「時事英語」の授業の取り組みについて報告した。英語学習者用に加工を加えていないニュース報道や、新聞記事を「Authentic教材」として活用することで、英語の4技能(読むこと、聞くこと、書くこと、話すこと)の伸長と生徒の興味関心の向上から醸成される内発的動機付けの向上を仮説とし、その効果を報告したものである。

本校国際教養科の「時事英語」の特徴は、①市販の教科書を使用せず、自作のシラバスと「Authentic教材(教材用に加工しないニュース映像や新聞記事等)」を使用すること、②ニュース等で知ったことについて自分自身の分析や、考察を加えて他者と共有するための「プレゼンテーション活動」、③「テレビ会議システム」でオーストラリアの高校生と日本文化や海外のニュースについて発表したり議論すること、の3点である。これにより、「英語でニュースを読んだり視聴して情報を得る」→「そのテーマについて調査研究、分析する」→「それについて発表、意見交換、議論する」という過程が可能になり、英語の4技能の伸長と思考力、表現力など言語能力以外の力を育てることができることと、「本物」が持つ、難解だがやりがいのある教材により、生徒の学習意欲も高まることが事後のアンケート調査でわかった。

今回は16コマの授業時間を使い、国際学習到達度調査(PISA)などを調査・報告しているOECDの「Better Life Index」を教材とした。そのニュース映像を視聴したり、新聞記事や報告書を読み、首位のオーストラリアと21位の日本を比較分析し、ビデオ会議システムでオーストラリアの生徒と議論することにより理解を深めた。最終的には「日本がランキング上位に入るためにはどのような政策や提案が考えられるか」をエッセイでまとめることを最終ゴールにした。

事後の調査では、加工しないニュース素材など映像資料の視聴により聞く量が増大したこと、オーストラリアの学生に向けてプレゼンテーションや議論することで表現力が向上したこと、Better Life Indexの調査結果の背景には、文化的、社会的、地理的な要素が大きく影響していることがわかり、各国の政治、経済、地理、習慣や社会について知ること、異文化について興味関心が高まった。ゴールである英文エッセイでは、定まった解のない問いに対して答えを自分で導き出して表現する過程で、自国について強みやよい点を踏まえ、今後の課題や改善点について考察することにより英語で表現する意欲と能力は向上し、Authentic教材が学習者に及ぼす一定の効果が見られた。

「小学校新指導要領の外国語活動(英語活動)が子どもたちにもたらした変化

—3000 人の子どもたちが教えてくれる成果と課題—

札幌大谷大学社会学部 久野寛之

本発表は、2009 年度と 2012 年度の 2 回にわたって行ったアンケート調査の中間報告である。データのクリーニングが完全に終了していないため、内容はあくまで暫定的な性質のもので、最終報告とは食い違う部分が出てくる可能性があることを踏まえた上で、(1) 新指導要領前後の小学校における英語学習の質的变化に関連する結果と、(2) 今後の課題として認められる結果について、調査の結果と分析の一部を報告する。

2009・2012 アンケート調査は、平成 20 (2008) 年の学習指導要領改訂が小・中の英語学習に及ぼす効果の検証を目的として、A 市 (人口約 6 万) の小 5～中 3 を全数調査したものである。諸般の事情により、調査時期がずれ、2009 年度が 9 月～11 月、2013 年度が 2 月～3 月の実施となり、正確な比較を行う上での最大の問題となった。また、回答方法も、2009 年度は集合調査法(学校の教室で一斉に回答させる方式)で、2012 年度は宿題調査法(教室で配布し、自宅で回答させたものを教室で回収する方式)に変更した。ただ、回答の回収率は、2009 年度が 92.4% (3,333/3,607 名 : 小 5～6 計 1,357; 中 1～3 計 1,976)、2012 年度が 86.5% (2,967/3,430 名 : 小 5～6 計 1,197; 中 1～3 計 1,770) という結果で、先生方のご協力のおかげで、回収率の著しい減少は回避できた。アンケートの質問内容 (詳細は <http://fles.asia> で) は大きく次の 4 つの質問群に分けられる。(1) 学校外での英語学習、(2) 小学校での英語活動と楽しさ・関心度 (中学生は小学生時代の記憶から回答)、(3) 学校での英語使用場面とそれに伴う不安感、(4) 学校での英語指導や英語学習に対する見解・態度 (積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度に関する質問を含む)。なお、質問群(2)

では、中学生に小学校時代の記憶から回答させているが、このような回想法による調査の妥当性を、同一回答者群 (2009 年度の小学 5・6 年生と、2012 年度時の中学 2・3 年生) の回答内容を比較することによって検証することも調査目的の一つとなっている。

2009 年度と 2012 年度の中学生の回答を比較することで、「総合的学習」の枠組みの中で行われていた英語体験と「外国語 (英語) 活動」の中での英語体験との効果の比較ができると考えた。また、両年度の小学生の回答を比較することで、新指導要領への移行期とそれ以前・以後の差と、その差が中学生の回答にどう影響しているかを調査できると考えた。今回は、中学生データの比較と、そこから見えてくる課題の考察に限定して報告する。

1. 分析

分析 (ウィルコクソンの順位和検定 (Mann-Whitney 検定)、 χ^2 乗分析、残差分析等) の結果、新指導要領移行期 (以下、移行期) の小学校外国語活動 (以下、英語活動) を経験した小学生に次のような肯定的な変化があったと言える可能性のあることがわかった。

1. 質問群(2)の「楽しさ」についての回答では、2012 年度の全 18 項目のすべての英語活動について、2009 年度より 2012 年度の方が、「楽しかった」と回答した中学生が有意に多かった ($p < .01$)。つまり、移行期の小学生の方が英語の授業をより多く楽しんだ。
2. 質問群(2)の「(しなかったけれど) してみたかった」活動では、2012 年度の方が 2009 年度より有意に多かったのは、「日本語を使わないで、隣の人や班など小さいグループの中で、英語でゲームをすること」 ($p < .05$)、
「日本語と英語の音の違いについて先生か

ら詳しく習うこと」($p<.01$)の他、文字学習を扱う4つの活動($p<.01$)などであった。つまり、移行期の学生の方が、小グループ活動やゲーム、発音の学習、文字の学習についてより強い関心を持っている。

3. 質問群(3)の、英語使用場面毎にどの程度の「不安度」を感じているかという質問に対しては、ペアや小グループなど気心の知れた者同士で英語を使う場面や、他のクラスや学年の前での発表場面については2009年度と2012年度の間有意差はなかったが、ALTや馴染みの薄い人に対して英語を使う場面に関しては有意差があった。つまり、1対多ではなく、1対1の個別コミュニケーションでは、相手との親疎の度合いにかかわらず、移行期の生徒の方がそれ以前の生徒よりも気楽に英語を使えるようになっている。
4. 質問群(4)の学校での英語指導や英語学習に対する見解・態度を問う質問群では、全般的に移行期の学生の方がより肯定的な回答をする傾向を示した。特に、「積極的にコミュニケーションを凶ろうとする態度」に関する質問として設定した質問5。「英語でクラスのいろんな人と話す練習をしていると、ふだんあまり話をする事のないクラスの友達にも気軽に話しかけられるようになった」や、質問19。「英語を勉強しているので、まちかどで外国人に出会ったら、話しかけてみようという気持ちになる」で、移行期の学生の方が有意により肯定的な回答をするようになった(質問5. $p<.01$ 、質問19. $p<.10$)ことは注目に値する。

II. 課題

今後考慮し、取り組むべき課題として見えてきたと言えそうなものをまとめると、以下のようになる。(ただし、以下で扱っているデータは2012年度の回答のみ。割合は四捨五入後の値。)

1. **入門期の負担軽減策として：** 文科省によれば、小学校英語活動の役割の一つに、「中学校に入学した段階で4技能を一度に取り扱う(ことに伴う)指導上の難しさ」(文科

省『指導要領解説』。括弧内筆者)の軽減がある。質問3。「小学校でやった英語活動は中学校の勉強でいまでも、役立っていると感じますか」に対して、「入門期」の中学1年生(新指導要領の完全実施年度に小6だった現中学1年生)は、その7割が小学校の英語活動が役立っていると感じている。また、移行期に小5・小6だった現中2・中3の生徒たちでも、6割が「今でも」役に立っていると感じている。文科省の所期のねらいは達成されているように見える。ところが、質問3.で「役立っていない」を選んだ3割の中学1年生、4割の中学2,3年生(に、答える必要がないのに回答した生徒を含めた数)の6~7割が今まで一度も「役立っていると感じたことがない」と答えている。

2. 英語好き・英語嫌いの問題(1)： 英語がいつ好きになったか・嫌いになったか

- (1) 移行期に小5・小6だったグループに比べて、完全実施時期に小6だったグループの方が、英語が「小学校からずっと嫌いだった」を選んだ数が多い。(有意差の有無は検定していない。)
- (2) 「小4以前」から英語が嫌いだった生徒は、23% (中1、中3) ~25% (中2)にも及ぶ。
- (3) 中学校で「好き」から「嫌い」へ転じる場合、5割 (中3)、7割 (中2)、8割 (中1)の割合で中1が多く、逆に「嫌い」から「好き」へ転じる場合も、3割 (中3)、6割 (中2)、8割 (中1)の割合で中1で起こる場合が最も多い。小5、小6で「嫌い」になる生徒の割合は全体の1割程度、多くて2割に過ぎない。(有意差の有無は検定していない。)

3. 英語好き・英語嫌いの問題(2)： 英語がなぜ好きになったか・嫌いになったか

- (1) 中2、中3では「ゲーム等で授業が楽しいから/授業が楽しくないから」と「理解できるようになったから」がともに自由記述欄に書き込んだ生徒の1

割前後。一方、中1では、「楽しさ」の問題を理由として挙げた生徒が全体の16%もいるのに対し、「理解」の問題を挙げた生徒の割合は7%に過ぎなかった。

- (2) 「どんな授業をしてもらえれば、嫌いな英語が好きになったり、好きな英語がもっと好きになったりできると思いますか。」という質問に対する回答をキーワードで分類してみると、どの学年も全体の15~18%の学生が、「楽しく」・「わからない」・「易しく、わかりやすく」というキーワードを記述の中に含めていた。その次に、「ゲーム・遊びで楽しく」と「先生、先生の教え方」が1割前後で続くが、中1だけ、「ゲーム・遊びで楽しく」の割合が16%と突出していた。

4. 「楽しさ」の中身

「小学校の英語(活動)の時間で心から『楽しい!』と思えた」のはどんなことをしていた時か、また、「中学校の英語の授業で心

から『楽しい!』と思える」のはどんなことをしている時かについて尋ねると、いわゆるゲームや、クイズ、遊び、その他のゲーム的な活動を挙げる回答が5割~6割にも及んでいた。それ以外はおしなべて1割程度か1割にも満たない。

Ⅲ. 今後の課題のまとめ

1. 「役立っていない」問題： 小学校英語活動に対して、「役立っていると感じたことがない」という回答が全体の2割~3割にも上っている。今後この数値を低くしたい。
2. 《中1プロブレム》と接続の問題： 英語が好きになるのも、嫌いになるのも中1が一番大きな分岐点になっているようだ。小6から中1への移行時に、受け入れる中学の側では、小学校での「楽しい」活動の要素を取り入れる配慮、送り出す小学校側では、活動の目標の明確化と達成度の可視化といった『わかった』という感覚への配慮や評価方法の工夫が必要ではないだろうか。
3. 読む・書く活動に対する小学生のニーズを今後詳しく研究していく必要がある。

招待発表

“Unexpected Things in Our English Life: Three Great Assets for EFL Learners”

佐藤 文子

英語学習に必要なのは、インプットとアウトプットである。インプットは、市販のテキストを使ったり、NHK のラジオ講座などを利用することで可能だが、アウトプットは、会話をする相手が必要である。

高い授業料を払って英会話学校に通わなくても、日本人同士で英語を話す場所があり、そこで英語でコミュニケーションする力をのばすことができる。

よく、日本人同士だと、文法や発音も訂正してもらえないではないかという疑問が呈されるが、間違っても、あとで勉強して覚えればいい。

たとえ、英会話学校のレッスンで会話したとしても、一人が話す時間は5, 6分しかない。これでは、英語を話す力はなかなか伸びない。上手になるためには、大量にインプットして大量にアウトプットしなければならない。日本人同士でも、大量にアウトプットすると、確実に話す力は伸びる。私自身も通った英会話サークルを紹介する。

1. 札幌英会話協会 通称「アクセス」

50年以上の歴史があり、宇宙飛行士の毛利衛さんもこのメンバーであった。ボランティアで運営されている。毎週金曜日、午後7時からエルプラザで、例会がある。

いつも40から50名くらいの参加者がある。いくつかのグループに分かれ、それぞれが独自のやり方で英語を学んでいる。NHK のテキストを使用しているところもあれば、英文記事を使ってディスカッションしたり、英語でただ自由に話すだけというグループもある。初心者向けのグループもある。初心者から上級者まで対応している。

2. 札幌英語ディスカッショングループ

元アクセスメンバー関谷成美氏が立ち上げた英語学習会。

フリートークで毎回様々なトピックについてディスカッションする。誰でも参加可能で、ネイティブのアドバイザーがいる。

3. みらい英語学校 ワンコイン英語サロン 通称 EV

アクセスの元メンバーだった須釜氏が10年前に設立した英会話学校。生徒は、主に中高年が多い。この学校の生徒でなくてもEVに参加できる。

EVでは、二人一組で15分間英語で会話する。その後相手を変えてまた15分。1時間に4人の方と話ができる。英語が上手く話せない人や、言葉に詰まったときは、コーディネーターという方がそばについていて、手助けをしてくれる。初心者から中級者向けだ。

4. トーストマスターズクラブ

第2、第4水曜日の午後7時から、リンケージプラザで例会が開催されている。英語によるコミュニケーション能力とリーダーシップ技能の向上を目的として活動するグループ。ここでは、毎回メンバー各々が、即興でスピーチすることも求められるので、スピーチ能力、プレゼンテーション能力が伸びる。度胸も付く。

私が通っていた平成12年から15年当時は、アクセスには、英検1級保持者が3人いた。3人とも、留学経験なしだ。かれらの存在が私の英語学習のモチベーションを高めてくれた。私は、英文科卒ではなく留学経験もなく、日常生活で英語を話す機会もない。ほとんど独学で英語を学び、彼らをお手本にしてきた。英検1級を目指してから何度も試験に落ち続けたが、あきらめずにこられたのは、アクセスの仲間たちの存在だ。これが、

一つ目の宝。

アクセスに通っていなければ、英検1級に合格したいなどとは思わなかった。ついに、2011年度第3回実用英語検定1級に合格した。これが、二つ目の宝。

トーストマスターズの例会で大谷大学の久野先生にお会いしたのは、たった1回きり。にもかかわらず、英語に関して専門的なバックグラウンドもない私に、こうしたチャンスを与えてくださっ

た。こうした思いがけないチャンスを得られたことこそが、三つ目の宝だ。

私の英語人生において、思いもかけない出来事、三つの宝を得られたのは、日本人同士で英語を話すということから始まった。これは、私だけではなく、みなさんにも起こり得ることだと確信している。

聴衆参加型特別プログラム

佐藤文子氏の研究発表の中で、「日本人同士で英語が学べる札幌市内の団体、グループ」として4つが紹介されたが、そのうちの一つである **Sapporo Pioneers Toastmasters Club** の例会が今回の研究会で実演された。デモ例会では、担当者の浦口宏二氏の短い解説をはさみながら、通常の例会と全く同じ内容と形式の活動が実演された。研究会参加者は、本物の例会を外から観察すると同時に、**Table Topic** と呼ばれる即興スピーチでは、例会の中に直接参加することで、このグループの活動について体験的に理解を深めることができた。当日参加できなかった方々のために、デモ例会実施担当の浦口宏二氏に助言を得ながら、**Toastmasters Club** の紹介と今回のデモ例会の報告を **SPELT** ニュースレター編集局がまとめた。

Toastmasters Club (Sapporo Pioneers Toastmasters Club) のデモ例会

当日司会・解説担当 TM 浦口宏二

<沿革・組織>

1. トーストマスターズ (Toastmasters International、以下 TMI) は、1924 年にアメリカのカリフォルニア州でスタートした教育 NPO で、パブリック・スピーキングとリーダーシップのスキル養成を目指している。現在 122 ヶ国に 1 万 4000 以上のクラブ、29 万人以上の会員がいる。日本では、2013 年 9 月 1 日現在 144 のクラブが活動しているが、北海道で **Toastmasters Club** として登録され、活動しているのは、今のところ **Sapporo Pioneers Toastmasters Club** (以下、札幌 TMC) の 1 つしかない。
2. 「トーストマスター」という名称は、今では世界的な機関となったこの組織がアメリカで産声をあげた当時の名残である。現在は、“toast” と言えば「祝杯、乾杯の挨拶」のことを言うが、当時は、人前でスピーチをする主な場の一つが晚餐後に行うスピーチで、そのスピーチのことを **toastmastering** と呼んでいた。現在では、**Toastmasters Club** の大会などで特別の晚餐会があり、そこで晚餐後のスピーチが行われることはあっても、クラブの例会で正式の晚餐やスピーチを行うことはまれである。

<会員・例会運営>

1. 札幌 TMC では、一般の職業人から主婦、大学生、外国人留学生に至るまで、さまざまな人々が会員として活動している。例会開催日時、開催頻度は各クラブごとにまちまちで、札幌 TMC は、毎月第 2、第 4 水曜日の午後 7 時～9 時に、リンケージプラザ (札幌市中央区北 1 西 9) を会場として活動している。毎回平均して 20 名程度の会員が集う。
2. TMI アメリカ本部の活動と札幌 TMC の活動は、月額 1000 円の会費で運営されている。会員になると、アメリカの本部から 10 回分のスピーチマニュアルが送られてくるので、そのマニュアルを使って、例会での活動に参加し、目標とする能力や技能を磨いていく。本部からは、マニュアル以外にも、会員の能力、技能の向上を支援するため、毎月 **Toastmaster** という有益な情報が満載された会員情報誌が送られてきて、大変ためになる。また、札幌 TMC のホームページはもちろん、**Toastmasters International** の公式ホームページの会員限定サイトにもアクセスできるようになる。

<特徴>

1. いわゆる教師やアドバイザーはいない。

そのかわり、段階的に課題が設定されたスピーチマニュアルと会員同士の前向きな論評によって、楽しい雰囲気の中で目標としているスキルが磨かれていくようになっている。

2. 毎回変わらないメニュー

通常2時間の例会は、いつも同じプログラムで行われる。会員は、プログラムの中で毎回違う役割を割り当てられ、役割に応じて1~3分程度の発表や報告をこなすことでショート・スピーチのスキルが磨かれていくよう設計されている。

3. パブリック・スピーキング技能とリーダーシップ能力の向上のための3つの軸

プログラムの中で特に重要なのは、準備して行うスピーチ (Prepared Speech)、即興スピーチ (Table Topic)、論評 (Evaluation) の3つである。特に、論評は、トーストマスターズの最大の特徴

とも言えるもので、欠点の指摘ではなく、あくまで話者の上達のために行われる。論評者は、話者の良い点を見つけて正しく評価し、欠点に対しては、「こうすればもっとよくなる」のような前向きなアドバイスを行うことと決められている。このため、論評はスピーチ以上に難しい役割であり、毎回これをこなしていくことで、コミュニケーションとリーダーシップのスキルが磨かれる。

<今回のデモ例会プログラム>

TMI のプログラムは、一人のおしゃべり好きが、他の会員の貴重な時間を浪費してしまうことがないように、詳細なスケジュールに則って、毎回同じように運営されている。今回の例会では、通常7時から9時までの2時間を、3時から5時までの2時間として開催した。ちなみに、下記の例会次第のTMとはToastmasterのことを指す。会員は互いの名前の前にToastmasterということばを付し、敬称で呼び合っている。

SPELT 研究会・デモ例会次第

3:00 会長の開会宣言 (TM Saga)

3:03 その日の司会担当 TM が会員の役割分担を確認する (TM Uraguchi)

3:05 「Opening Thought (はじめに思うこと)」、「Today's Word (今日の表現)」、「Speech Session (スピーチの部)」の日本語解説 (TM Uraguchi)

3:08 はじめに思うこと (TM Janyl)

3:13 Grammarian (語法担当者) による「今日の表現」(TM Harada)

3:18 スピーチの部

(1) スピーチをする人の紹介 (担当 TM Uraguchi)

(2) 1人目 (TM Ueda) 『マニュアル基礎編』、課題3、「核心をつく」

スピーチ：“Global Leaders and English Education” [5~7分]

スピーチへの質疑応答・聴衆がスピーチについての短い論評を書く [1~3分]

(3) 2人目 (TM Sado) 『マニュアル基礎編 (第2ラウンド)』、課題2、「構成を組み立てる」

スピーチ：“What did I learn from living in the United States” [5~7分]

スピーチへの質疑応答・聴衆がスピーチについての短い論評を書く [1~3分]

3:45-3:55 休憩

3:55 「Table Topic Session (即興スピーチ)」の日本語解説 (TM Uraguchi)

3:58-4:28 即興スピーチの部 (担当 TM Mano)

即興スピーチのお題やその取扱い方は、担当者の工夫にゆだねられている。今回の例会では、「Proverbs (ことわざ)」がお題として与えられた。与えられたお題でTM全員が1分以上2分30秒以内の即興スピーチをする。今回の工夫は、一つのことわざについて全員が順番にスピーチをするのではなく、担当者が、ことわざを30印刷したプリントを配布し、参加者一人一人に紙

袋からくじを引かせ、そのくじで当たった番号のことわざについて話をするという形式をとったことだ。これによって、順番が後になるほど準備時間が長くなるということがなくなり、各スピーチの即興性が維持された。

4:28 即興スピーチの部担当者が時間測定係に各スピーチの所要時間を確認する
最優秀即興スピーチの投票（全員）
投票集計係が投票用紙を集める（TM Mohan）

4:32 「Evaluation（論評の部）」の日本語解説（TM Uraguchi）

4:35 論評の部（TM Konishi）

4:36 1人目のスピーチの論評（TM Saga）[3分]

4:40 2人目のスピーチの論評（TM Nakayama）[3分]

4:44 時間計測係の報告（TM Sano）

4:45 “Ah”発話回数勘定係の報告（TM Ito）

日本語でも、話の合間に「ああ」や「うう」といったことばが何度も入ると耳障りで、聞き苦しくなる。英語では“Ah”がそれにあたる。その“Ah”を誰が何回言ったかを勘定し、報告するような係を置くことによって、英語で話す機会を1人でも多くの会員に与え、人前で話すのが苦手な会員が人前で話をするに少しずつ慣れていけるよう工夫されている。

4:46 Grammarian（語法担当者）の報告（TM Harada）

4:47 最優秀即興スピーチの発表（TM Mohan）

4:48 全体論評者による論評（TM Konishi）

4:50 会長による閉会宣言（TM Saga）

（文責： SPELT ニュースレター編集局）

シリーズ 小学校からはじまる実用英語教育

久野寛之（札幌大谷大学 教授）

第4回 「“Nice to meet you.” と “Good to see you.”」

Sooo much underused! 使われなさすぎ!

あまりによく使う表現なのに、あまりにも知られていない——そんな表現の一つが “Good to see you!” です。

“Good to see you!” がここまで知られていない理由は、単に、教室で使われていないからだと思えます。教育実習先での教え子の研究授業や参観した小学校の研究授業を、合わせて 20 回程度見ただけで判断するのは早計かもしれませんが、先生が “Good morning, class! Good to see you.” などと言って授業を始めるのを見たことがありません。大抵の場合は “Good morning, class.” とか “Good afternoon, class.” そうでなければ、 “Hello, class!” ですね。今回の連載では、 “Good to see you.” の認知度、教室での使用頻度の低さの原因も含め、小学校からこの表現に慣れ親しんでいくことの大切さについて考えてみたいと思います。

使い方（その1）

——1 度目か 2 度目か、それが問題だ

初対面の人には “Nice to meet you.” です。いままでは小学生でも知っている有名な表現ですね。それに対して、一度でも会ったことのある人には “Good to see you.” これが “Nice to meet you.” と “Good to see you.” の基本的な使い分けです。だから、初めて会った人なのに “Good to see you.” などと言うと、 “Ah, have we met before?”（あ、う、以前お会いしましたっけ）とか、 “Ah, where did we meet?”（あ、う、どちらでお会いしましたっけ）などと聞か返されたりするかもしれません。 “meet” か “see” か、たった一語で随分と違うものです。

- | | |
|------|--|
| 第1回： | ○と× |
| 第2回： | 数と数字 |
| 第3回： | アルファベット |
| 第4回： | “Nice to meet you.” と “Good to see you.” |
| 第5回： | “Excuse me.” と “I’m sorry.” |
| 第6回： | “Sir” と “Ma’am” |
| 第7回： | “Uh-huh” ・ “Uh-uh” ・ “Uh-oh” |

使い方（その2）

——「おはよう」「こんにちは」の代わり

初対面の挨拶の決まり文句 “Nice to meet you.” の使い方を今さら説明する必要はないと思いますが、 “Good to see you.” はどうでしょうか。アメリカにいた頃の毎日の生活や、帰国後同僚の北米及び豪州出身のネイティブたちと交わすやり取りを振り返ると、大体次のような感じで使うことが多いです。例えば、廊下を足早に歩きながら教室に向かっていて、 “How are you doing?” と言っている暇もないくらい急いでいる時など、すれ違いざまに、

A: Hi, Betty! Good to see you.

B: Good to see you, too, Paul!

というような具合でことばを交わします。つまり、 “Good morning.” とか “Good afternoon.” の代わりになるというわけです。代わりになるので、

これは案外知られていないことだと思えますが、いま上で挙げた例を見てもわかる通り、別れ際の挨拶にもなります。例えば、次のような例を考えてみましょう。

初対面の人には “Nice to meet you.” 一度でも会ったことのある人には “Good to see you.”

A: Hi, Betty! How are you doing?

B: Well, not too good, actually.

A: Sorry about that. Take care then, Betty!

B: Thanks, Paul. I will. Good to see you!

この例では、“Good to see you.”がBさんの別れ際の一言になっています。これが午後の会話で、それも、我々が夕刻と呼ぶにふさわしい時間帯に近づきつつある頃に起こった会話なら、“Good to see you.”の代わりに“Have a good evening.”か“Good evening.”と言うところですね。その代わりになるわけです。

閑話休題 「えっ、別れ際に“Good evening”なんて言うんですか?! その英語は、出合いがしらにかけることばじゃないんですか？」

ちょうどいい機会なので、お答えします。出合いがしらじゃなくても**言います!**これに関して、今から十数年前に経験したとても面白い出来事をぜひご紹介させてください。90年代で、まだまだ日本語ブームが続いていた頃、ナッシュビルを訪れた日本人生徒たちと引率の教師の一行が、あるテレビ番組の生放送に出たことがありました。確か週末の午後の番組だったと思います。その一行がどうしてその番組に招かれたのかは全く記憶にないのですが、そのとき目撃したとても面白い光景は忘れられません。こんな感じです。

Host: Thank you for being on our show today. Good evening to you all.

Guest: 沈黙

その番組のホストが最後に言った一言“Good evening”に何と返答したらいいのかわからず、引率の先生が《固まって》しまったのです。それはそうでしょう。日本では、“Good evening”は出合いがしらに言うものだと言われるのが普通ですから。そして、ネイティブでもそういう語感を持っていて、別れ際に言うのは、“Good evening.”じゃなくて、“Have a good evening.”だと言う人もいます。しかし、そう言うネイティブもいるのです。実際、ネット上には、この話題で盛り上がった電子掲示板があって、そこにはこんなコメントがあります。

I would certainly say "Have a good evening" when departing from someone after dinner, and I'm not at all sure that I've never said "Good evening" when departing. I don't remember ever learning a rule that "Good evening" = greeting only. If I had been with someone for some time, and he or she was getting ready to leave, I don't think the other person would interpret "Good evening" to mean that I meant to prolong the encounter. I think of "Good evening" at departure as more formal than "Good night," sometimes used facetiously. On the other hand, there is, as far as I know, no "Good evening kiss."

(全訳: 夕食後の別れ際なら、きっと私も“Have a good evening”と言うと思います。でも、今まで別れ際に“Good evening”と言ったことが一度もないとは言いきれません。「“Good evening”=出合いがしらだけ」という規則を習った覚えはありません。もし私が誰かとしばらく一緒に時間を過ごした後、そろそろいとまごいをしようかという時間になって、二人のうちのどちらかが“Good evening”と言ったら、それをもう一人が出合いがしらの一言のように「これからあなたともっと話をしたい」と解釈することはないと思います。私には、別れ際に言う“Good evening”は“Good night”よりも改まった表現のように思えますし、ちょっとふざけた感じでそんな言い方をする時もあるように思います。ただ、そうは言っても、私の知っている限り、“Good night kiss”とは言いますが、) “Good evening kiss”と言うことは絶対にありません。)

<http://forum.wordreference.com/showthread.php?t=287453> [2013年11月25日現在]

使い方 (その3)

——“Nice to see you.” vs. “Good to see you.”

私がジョージア州にいた11年半の間、いつも耳にした表現は“Good to see you.”の方です。“Nice to see you.”とも言えますが、Georgians (ジョージア州の人たち)はおしなべて“Good to see you”派。北部の人たちは、よく南部のことばをばかにするのですが、じゃあ、“Good to see you.”は南部の田舎者だけが使っているのかと言うと、そうでもな

いようです。元ジャパン・タイムズ編集長の伊藤サム氏は、ニューヨークに生まれ、北西部モンタナ州で育った故マンスフィールド駐日大使に初めて会ったとき“Good to see you.”と言われたと書いています (<http://bookclub.japantimes.co.jp/act/Word.do?id=77>)。マンスフィールド大使のような政治家は、不特定多数の人々と会う職業なので、相手が以前会ったことのある人間かどうかわからないこともある。そういう場合は、大使のように、“Good to see you.”で逃げる手もある。もう、勝手に以前どこかで会ったことにしちゃえ、というわけです。確かに良い手です！でも、逃げて追っかけられないのは大使のような大物だけで、我々 nobody (そこいらの名もなき一般人) の場合は、上(「使い方(その1)」)で書いたように、「えっ、どこでお会いしましたっけ」と聞き返される可能性に備えておかなければなりません。「えっ、初対面でしたっけ？」＝「えっ、会ったことありませんでしたっけ？」“Well, haven't we met before?”とすっとぼける用意をしておきましょう。

使い方 (その4)

——“Nice seeing you.” vs. “Good to see you.”

ちょっと話が横道にそれましたが、要は、アメリカでは、“Good to see you.”は南部、北部の区別なく、同じように使うということです。また、ネット上で調べてみると、ネイティブでも、“Good to see you.”と言うか、“Nice to see you.”と言うかはまちまちです。だから、英語を母語としない私たちも、好きに使い分ければいいわけです。

さて、このように、同じ英語ネイティブであっても、個人によって使い方が異なるものはいろいろあるのですが、“Good to see you.”との関連で、最後にもう一言だけ付け加えておきたいのが、“Nice seeing you.”と“Nice to see you.”の違い、それに、“Good seeing you.”と“Good to see you.”の違いです。さらには、“Nice to meet you.”と“Nice meeting you.”の違いも同様ですね。つまり、動名詞のing形を使うのと、to不定詞を使うのと、何か意味上の差が生じるのか(文法問題)、それとも、意味の差は生じず、単なる個人の好みや言語習慣の問題なのか、ということです。紙面

の関係上、結論から言うと、どちらもありますが、文法的な要因も多少働いてもいるようです。すなわち、一般的に“Nice/Good to see/meet you”は出会いがしらに、“Nice/Good seeing/meeting you.”は別れ際に言うという使い分けがあるようです。ただ、“Good/Nice to see/meet you.”に“It was”という語句をつけて“It was nice/good to see/meet you.”と言えば、別れ際の挨拶としても十分に成立します。そのため、“It was nice/good to see/meet you.”から“It was”を省略した形として“Nice/Good to see/meet you.”と言っているという意識が働く場合は、それを別れ際に言ってもOKということになるようです。

“Nice to meet you.” = 「はじめまして」？ ——そう教えることの問題点

構造上はとても似ているのに、初対面の人には“Nice to meet you.”で、一度でも会ったことのある人には“Good to see you.”を使うという意味上の違いがある。そんな二つの表現を見れば、どうしても、“see”と“meet”の違い、すなわち「初めて会った」のか「これまでに会ったことがある」のかという違いの方にばかり注意が向いてしまい、この二つの表現“It is good/nice to...”が共通して表す意味、「～するというのは良いことだ／喜ぶべきことだ」の方に注意が向かなくなるのは無理ありません。ひょっとしたら、それが日本の教室で“Good to see you.”があまり使われない本当の理由なのかもしれません。

アメリカで生活して、“Good for you!”(よかったねえ!)などと同じくらい何度も何度も耳にするからでしょうか、“Good to see you.”や“Nice to meet you.”という表現を聞くと、初対面かそうでないかという意味のことよりも、“Good”だの“Nice”だのという、これらの表現に込められた一番大事なメッセージの方がそのまま頭にスーッと入ってきます。また、私のように、不本意な交通事故を経験して、日々の命の危うさと貴さを痛感している人間なら、昨日会った学生たちに今日もまた無事再会できたことが本当に「良い」ことだと実感できるので、同僚と廊下ですれ違ったり、教室で学生の顔を見たりしたとき、本当に、心の

底から “It’s good to see you.” と言いたくて、“Good to see you.” と言っています。“Good to see you.” という表現自体は知っていても、“It **IS** good to see you.” (また会えて本当に良かった!) という気持ちが持てなければ、なかなか口から出てこないということなのかもしれませんね。

「会えたことが本当に良いことだ」と思う気持ちは、“Nice to meet you.” (あなたに出会えて良かった) も同じです。ところが、教室でこの表現を教える時は、「はじめまして」という意味だよと教えて、それで終わりとする人が多いのではないのでしょうか。ここまで見てきた通り、“Nice to meet you.” には、日本語の「はじめまして」という意味はありません。もう一步踏み込んで言えば、「はじめまして」は「初めてお会いしますね」という事実を述べているだけで、それを喜ぶ気持ちまでは言語化されていないけれども、英語の方には、「会えて良かった」という喜びの気持ちが表されています。これは、とても大事な違いです。できれば、“Nice to meet you.” を「はじめまして」と同じ心で言うのではなく、喜びの心をもって “Nice to meet you.” を使えるように教えてあげたいものです。初対面かそうでないかという違いはあっても、“Good to see you.” も同じです。子どもたちが、毎日 “Good to see you.” ということばを「また会えて良かったよ」という気持ちで交すことによって、互いに対して心からそう思い合えるような教室、学習環境を作ってあげられれば、それ以上に素晴らしいことはないと思います。

最後に

“Good to see you!”——この表現は、英語圏、少なくとも、北米ではきわめて日常的に使われ、対人関係構築上大変便利な表現です。こんなに実用性の高い表現を普段からもっと教えてあげて、“Nice to meet you.” と同じくらい気軽に、そして自然に使えるようにしてあげたいなあと思います。ところが、日本では、高校までの6年間の英語教育を終えてもこの二つの区別を知らない学生がかなりの割合で存在します。もちろん、学生だけで

はありません。あるとき、研究旅行で何度も海外に渡っておられる高名な先生とお話をしていた時、たまたまこの “Good to see you” のことが話題になって、「えっ、そうだったんですか?」と、びっくりされ、それを見てこちらもびっくりしたのを覚えています。お若い先生だったので、いまだにこの実用的で便利な表現が日本の英語教室で無視され続けているのかと、非常に残念な思いをしたものです。そろそろこの流れを変える時期ではないでしょうか。“Good to see you” を、小学校からぜひ継続して教えてもらいたいと願います。私のように、28歳でアメリカに渡って初めてこの表現に出会うというような子が日本からいなくなるように、小・中・高の先生方、どうぞよろしくお願いいたします。

役に立つネットサイト

今回は、二つの似た表現の使い方の違いに触れることが多かったのですが、表現上の違いには、純然たる個人差が関わっている場合も多いので、1人のネイティブに聞いただけでは安心できません。そこで、英語で同じような意味を表す二つの表現[A]と[B]の間にはどんな違いがあるのかを詳しく調べたい場合には、何人ものネイティブの意見を簡単に調べる方法があります。ネット検索です。Google でも Yahoo でも、どこでも、ネット検索するとき “difference between [A] and [B]” と検索語を入れるだけです。ダブル・クォーテーション・マークをつける必要もありません。検索結果には、色々な電子掲示板サイトでのやり取りが出てきて、とても面白いし、役に立ちます。私のお気に入り、回答者の居住地や母語、回答量などの回答者プロフィールが見やすく表示される(下記) wordreference.com のフォーラムです。

Join Date:	May 2006
Location:	California
Native language:	English, USA
Posts:	23,368

Wordreference.com のフォーラムサイトより

お知らせ

◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。内容については、学術的な実験・調査および理論的考察等をまとめた「研究論文」と、教育実践にもとづく知見を報告する「実践研究」の2部構成となっております。皆様の投稿をお待ちしております。

なお、投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませくださいますようお願いいたします。

そのほかの詳しい投稿規定については、事務局までお問い合わせください。

これまでに発行された研究紀要は実用英語教育学会ホームページからご覧ください。

実用英語教育学会ホームページ <http://spelt.main.jp/>

◆研究大会について

2014年2月22日（土）札幌大谷大学にて第3回研究大会を開催する予定です。研究や実践について発表する場でもありますが、学校種を問わず英語教育に日頃携わる方々と率直な意見交換のできる場をつくりたいと考えております。2月の研究大会で討議したいテーマやご意見をみなさまから募集しておりますので、12月23日（月）頃をめどにお気軽に事務局までお寄せください。

◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。



編集後記

今回は10月に行われた第2回研究会を中心にお伝えいたしました。いかがでしたでしょうか？2月には第3回研究大会を予定しております。その際に、また皆様にお会いできることを楽しみにしております。

早いもので12月も半ばにさしかかり、今年も残りわずかとなりました。

どうぞよいお年をお過ごしください。

実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員（石川希美・久野寛之・杉浦理恵）

発行：2013年12月14日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 久野寛之 研究室内

TEL: 011-742-1899 (直) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: info@spelt.main.jp ※◎を@に変えてください。